

要旨

1. 背景

近年、日本における人口減少や労働人口の減少、働き方改革（テレワークなど）、若者の PC 離れが進むなど、生活に変化が現れ始めています。また、人工知能（AI）、RPA、デバイス、BI、Big Data などの技術革新も進んでいます。

AI については第三次人工知能ブームにより、AI は私たちの日常の身近な商品・サービスに組み込まれはじめており、多くの人が人工知能を一度は使用したことがあるという AI 時代が到来していると言えます。また、企業の AI 導入は過去 4 年間で 270%も増加したという調査結果もあります。

AI を活用することで仕事の内容が変わり、労働負荷が大きく削減されることが期待されています。

2. 課題

しかし、AI 時代が到来しているとはいえ、総務省の調査によると、日本国内の職場に AI が導入されている割合は 5.0% との結果が出ています。

また、研究会において取得したアンケートにおいても、「AI を導入・活用したい」との回答の割合と比較し、「実際に導入・活用している」との回答の割合が極端に低いという結果を得ています。

AI 導入が大きく喧伝されてはいるものの、AI を実際に導入・活用できている職場はごく一部に限られている現実が存在しており、情報システム部門は AI の導入・活用の前に存在する大きな壁に悩まされている状況です。

4. 仮説

当研究会では、AI を活用したシステム開発の特性を明らかにし、AI 導入ガイドラインを策定することで、実際の導入・活用における壁を越えることができ、悩める情報システム部門の助けになるのではないかと考えました。

ガイドラインを作成するにあたり、AI を活用したシステム開発の特性を明らかにし、混乱しがちな以下の用語の定義を明確にしました。

- 生データ
- 学習用データセット
- 学習用プログラム
- 学習済みモデル
- 学習済みパラメータ
- 推論プログラム

要旨

ガイドラインについては、AI 導入を以下のステップに分けて内容の検討を行いました。

- AI の特性
- 目的の明確化
- 導入範囲
- データ
- AI 開発のアプローチ
- 運用

5. 検証

AI 導入のサンプルプロジェクトとして、チャットボットの導入プロジェクトを提示し、AI 導入ガイドラインを用いてプロジェクトの内容・結果について机上検証を実施しました。

この机上検証の結果から、作成した AI 導入ガイドラインは AI 導入プロジェクトを成功に導くガイドとして一定の効果があることが確認できました。

この AI 導入ガイドラインを活用することで、AI 導入・活用で悩んでいる情報システム部門の助けになることを期待しています。

出典:「平成 28 年版 情報通信白書 第 1 部」(総務省) (<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h28/pdf/n4300000.pdf>) 図表 4-3-3-1 職場への人工知能(AI)導入の有無および計画状況 2019 年 2 月 13 日参照

文章内の記載の会社名および製品名は、各社の登録商標または各社に帰属する標章もしくは商号です。